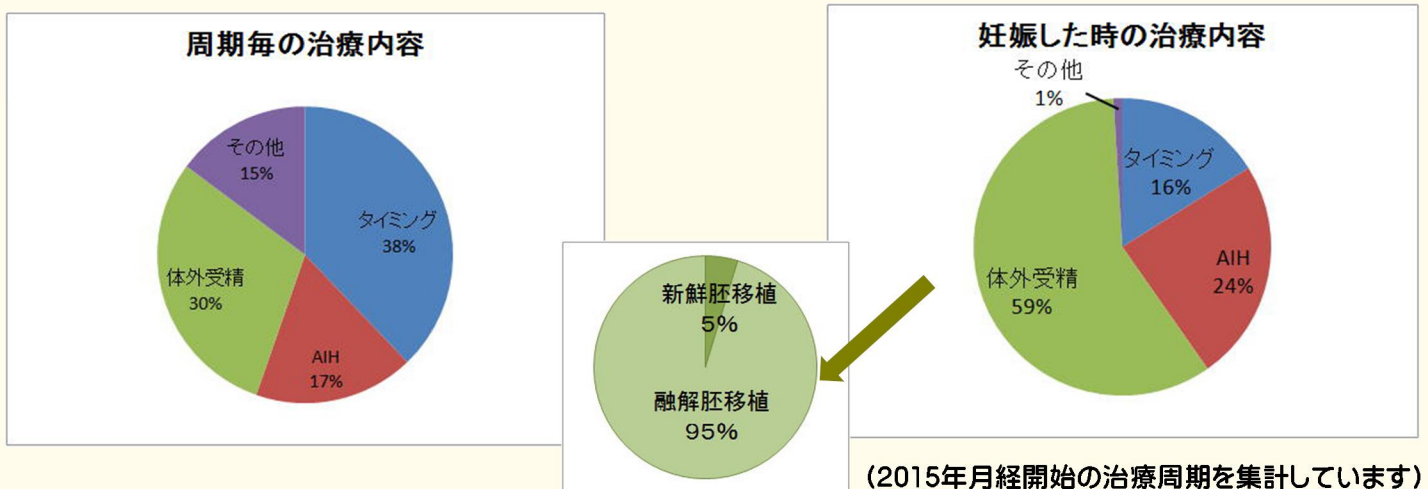


市街では聞こえませんが小鳥のさえずりも聞こえ爽やかな風が吹く季節になりました。同時に花粉症の方にとってはつらい季節です。症状が悪化する前に早めの耳鼻科、眼科の受診をし適切なケアで快適な5月をお過ごしください。

当院の現状

当院に来院されている患者様の周期別治療内容で最も多いのは、タイミング周期で、約38%です。これには人工授精予定でキャンセルになった周期や体外受精予定で卵胞が育たず採卵中止になった周期、融解胚移植予定で子宮内膜が厚くならず胚移植キャンセルになった周期を含みます。続いて多いのは体外受精関連の周期（融解胚移植周期やIVFの準備周期、採卵して全凍結となり移植をしていない周期を含む）で約30%、人工授精周期は17%です。一方、妊娠した患者様の内訳をみると、一番多いのは体外受精関連の周期で、全体の約59%を占めます。続いて人工授精周期が24%、タイミング周期が16%となっています。

つまり、この2つのグラフで分かることは、タイミング周期でチャレンジしている患者様が多いにもかかわらず、その多くは妊娠につながっていないという現状です。（実際、2015年のタイミング周期の妊娠率は3.3%でした。）金銭的・身体的な負担を考えると安易なステップアップはお勧めできませんが、年齢や治療別妊娠率を考慮し、できるだけ早い妊娠を目指してお手伝いさせて頂ければと思います。



また妊娠が一番多かった体外受精関連周期の内訳では約95%が融解胚移植での妊娠です。これは採卵した場合、多くは全胚凍結になるためと考えられます。2016年、融解胚移植は439件、新鮮胚移植は15件でした。このような傾向は全国的にも認められ、2014年の融解胚移植は152,847件、新鮮胚移植は29,988件でした。学会発表などでは全症例全胚凍結をおこなう施設も珍しくない印象です。凍結融解にはコストがかかり生存率が100%ではない、採卵周期での妊娠の可能性がなくなる、というデメリットがありますが、排卵誘発後の妊娠による副作用のリスクを避けられること、妊娠率が比較的高いと言われていることなど多くの場合でメリットがデメリットを上回るとされています。今後も採卵時のホルモン値や子宮内膜の状態によってよりメリットのある方を選択していきたいと考えています。

お知らせ

3月21日から4週間のカウンセリング件数は、予約のカウンセリングが 6件、
診察に来られた際に必要に応じておこなった随時のカウンセリングが 1件でした。

